都留文科大学研究紀要　第84集（2016年10月）
The Tsuru University Review, No.84（Octorber, 2016）

評伝 矢内原忠雄（十）

A Critical Biography of YANAIHARA Tadao (Part 10)

関口安義
SEKIGUCHI Yasuyoshi

第十章　戦中から戦後へ

一　『嘉信』と土曜学校

一九三八（昭和一三）年一月二十日、矢内原忠雄は新たな出発を目指し、前章で触れたように、それまで不定期・非売品だった個人誌『通信』を廃刊し、新たに月刊雑誌『嘉信』を刊行する。一冊三十銭、一年分送料とも三円六十銭であった。[1]『通信』最終号（49号、一九三七・一二）に、「『通信』を憐む」という短言が載っている。そこで矢内原忠雄は、『通信』を擬人化し、「汝『通信』よ、」と呼びかける。そして、「汝軽快な鳩の翼に『言』をのせて国の四方、地の極に迄も運び、汝の一言善く孤児寡婦を慰め、汝の一句は大臣総長を震駭させた。汝が強く敵の頭を打つたから、敵は汝の主人の踵を噛んだ。汝の故に汝の主人は傷ついた。併し悄気るな、汝はよく戦つた。／汝既に号を重ねること七の七倍した。我れ今汝を元服せしめ名を『嘉信』と命ずる。我は白馬に乗りて出で行く。汝『言』の槍を携へ、わが善きサンチョーとして我に従ひ来れ」と誇らしげに命じるのであった。

いかにも矢内原忠雄らしい、文学的修辞を凝らした『通信』への惜別のことばである。ここに言われているように『通信』は「孤児寡婦を慰め」、他方、文部大臣や東京帝国大学総長を「震駭させた」忠雄の言説の発表舞台であった。ここには「日本の理想を生かす為めに、一先づこの国を葬つて下さい」（「神の国」『通信』47号、一九三七・一〇）の一文が意識されているのは、言うまでもない。忠雄は

「白馬に乗りて出て行く」ドン・キホーテよろしく、〈戦闘〉の宣言をしているかのようだ。

『通信』を「元服」させ、『嘉信』に成長させた矢内原忠雄は、以後この雑誌を本拠にキリスト教伝道と聖書研究、そして時局批判に全力を尽くす。『嘉信』第一号に載った「創刊の辞」を以下に引用する。[2]

昭和七年九月私は満洲旅行の際匪賊に襲はれて列車遭難の事故があつた後、感ずる処があつて『通信』と題する小紙片を発行し、自分の消息・感想等を知友に伝へ、併せていささかなりとも基督の福音による慰めを世に送ることとした。之は不定期の発行ながら既に号を重ねること四十九に達し、又非売品であるが段々希望者も増えて来た。然るに今回私の平和論が禍して、列車ならぬ私自身の地位が顛覆し、東京帝国大学教授の職を退くことになつたので、之を機会に前の『通信』を止めて代りに『嘉信』といふ月刊雑誌を出すことにした。

私が信仰に基く自分の言論及び生活態度の故に大学教授の地位を失ふに至つたことは事実であるけれども、伝道若くは聖書研究に従事することを目的としてこの地位を棄てた者ではない。私は宗教家になり度くない。ただ之れ迄に比し身分も時間も自由になったから、一人の平信徒として啓示せられる神の愛と智慧とをば、一層広く、深く、且つ豊かに人々に頒ちたいと希ふのみである。

『嘉信』は、矢内原忠雄単独執筆の雑誌であった。大学を辞めたとはいえ、彼は忙しかった。『通信』最終号には、先の「『通信』を憐む」に続き、「『通信』の廃刊と『嘉信』の創刊」という文章があり、「私は今度大学を辞めて収入が無くなつた」ので、『通信』のようにタダで配ることができないとの理由が記されている。一冊三十銭は、それで多少の利益をあげるには、妥当な金額であったと見なされた。もし『嘉信』が一般の雑誌のように、何人もの執筆者に依頼して成り立つものであったら、長くは続かなかったに違いない。原稿料を払う必要もなく、編集・執筆を一人でしたからこそ長続きしたのである。

彼は第一に書くことが好きであった。神戸一中時代に育まれた文才は、『嘉信』でも十分発揮された。第二に彼は編集という作業が得意だった。創刊号には口絵にピエロ・デラ・フランチェスカの「イエスの受洗」を用い、第三号の口絵にはミレーの「種播く人」を用いるなど、名画で紙面を飾る楽しみを彼は好んだ。不定期刊の『通信』時代から編集の喜びを知っていた彼は、月刊雑誌の編集を楽しみながら行った。一九三八年一月刊行の『嘉信』創刊号の目次は、次のようである。

口絵　イエスの受洗
創刊の辞
◇
イエス伝講話（一）
最初の奇蹟
神の国の預言に就て
自由と統制

祝詞　◇

これらをすべて忠雄が一人で書いている。彼は楽しみつつ『嘉信』の原稿執筆・編集・発行に当たった。この中で「イエス伝講話」は、連載ものである。二十回の連載となった。現在『矢内原忠雄全集』第六巻に収録されている「イエス伝 マルコ伝による」は、戦後の角川書店版を底本としている。その「序」に彼は、「『嘉信』の創刊は前年（筆者注、一九三七）十二月私が東京帝国大学教授の職を辞した結果であつたが、その前後の嵐の中で私は新約聖書のマルコ伝の講義（筆者注、家庭集会等で）を続けた。それは日華事変の起つた直後であつて、基督教の信仰と平和思想に対し政府と国民の取つた、あの狂気じみた迫害・誹謗の真唯中に於てであつた。その中にありて、私はこの講義によつて、サタンの跳梁に対して真理を擁護し、キリストを信ずる者が迫害を怖れて世と妥協することなく、信仰の純粋性を維持すべきことを勧めたのであつた」とある。また、「私は右の講義を集め、『イエス伝講話』と題し、嘉信文庫第一冊として、昭和十五年六月に自費出版した」と記す。それは向山堂書店から刊行された初版を指す。

「序」には続けて、「私は専攻の聖書学者ではなく、また神学校出身者でもない。私は一介の平信徒である。故に私は神学者のごとく語らず、牧師のごとくに説教しない。私はただ一人の人間として、私の信ずることの出来た聖書の真理を単純率直に語る。私の念願とするところは唯一つ、それはわが愛する同胞がこの小著によりていくらかでも聖書に親しみ、聖書を知り、聖書を信ずるに至り、それによつて人類の将来と、国民の復興と、各自の人生について確固たる希望をもつことである。その事を祈つて、私の心は熱せざるをえないのである」とある。

『イエス伝 マルコ伝による』は、黒崎幸吉の主宰していた『永遠の生命』という雑誌に、まず三回（一九三七・一〇～一二）寄稿し、続編が『嘉信』創刊号から「イエス伝講話」として二十回の連載となった。いま、角川書店版『イエス伝』を底本とした『矢内原忠雄全集』第六巻によって、その内容を見てみよう。本書は、以下のような章立てをとる。

序
第一章　福音の始
第二章　伝道の始
第三章　戦闘の始
第四章　伝道第二段
第五章　湖水の彼岸此岸
第六章　地方伝道
第七章　ゲネサレ行
第八章　異邦の彷徨
第九章　ヘルモン山
第十章　エルサレムに向ふ
第十一章　最後の入京
第十二章　最後の論戦
第十三章　最後の預言
第十四章　葬の備へ

第十五章　最後の晩餐
第十六章　ゲッセマネ
第十七章　イエスの裁判
第十八章　イエスの十字架
第十九章　イエスの復活

こうして章立てを記して見ると、これは「マルコによる福音書」を対象とした講義ということになろうか。話術体の語りは親しみやすく、間然する所がない。第一章の「一　マルコ伝の特徴」の語り始めは、「イエスの伝記は新約聖書の中に四つ、マタイ伝、マルコ伝、ルカ伝、ヨハネ伝と四つの福音書がありますが、その中、マルコ伝によつて私はお話します。右四つの伝記は各々に特色があります。それを総合して立体写真の様にイエスの姿を構成するのも、イエス伝を学ぶ一つの方法でありますが、その中一つの伝記だけを見ても、個性のある見方でイエスの姿を学ぶ事が出来ます」となっている。「マルコによる福音書」のやや分かりにくい内容が、分かりやすく語られているのである。『通信』時代から忠雄は、聖書講義や講演を助手に採用した若い有能な女性の速記に託していた。

矢内原忠雄の回想記「思ひ出　四」（『葡萄』第七号、一九三九・四）によると、『通信』時代は久保田ちと子に、『嘉信』時代は籾山民子（もみやま）に、口述を速記して貰い、それに忠雄が手を入れて成ったという。二人とも速記術を習得し、久保田はペン習字まで習って、忠雄の講義を原稿用紙にきれいに清書してくれた。また、『通信』の原稿ばかりか、著書や他の論文の原稿の手伝いまでした。彼女は忠雄の出講していた東京女子大学を一九三二（昭和七）年に卒業すると同時に忠雄の助手となり、献身的に忠雄に尽くした。

矢内原伊作の『矢内原忠雄伝』には、「彼女（筆者注、久保田ちと子）は昭和一二年まで、ほとんど毎日彼の身辺にあって助手として働いた。二人のあいだにはあたたかい愛の交流があった。昭和七年から昭和一二年までといえば、ファシズムに対する忠雄の戦いが対社会的に最も鋭く激しく戦われた時期であり、彼の繊細な神経は痛み、ささくれだっていた。ますます「こわい」人間になっていた。怒り、傷つき、疲労していた彼の心は、この大柄で優しい若い女性の存在によって大いに慰められたのである。彼女は私の家にも始終出入りしていて、家族とも親しく、中学生だった私は彼女に英語の勉強を見てもらったりした」[3]とある。世間から糾弾され、孤立無援の忠雄の寂しい心を久保田ちと子は、仕事の支援を通して慰めていたのである。

他方、籾山民子は久保田ちと子の後を受けて、忠雄の助手となり、彼の死に至るまで、これまた献身的に忠雄の仕事を助けた。藤田若雄の「悲境にあつて福ひ（さいは）の日を／想ひかへすに優る悲しみなし」[4]には、「久保田ちと子（現姓平井）さんにかわって籾山民子さんが筆記をはじめたのは、昭和十二年十月のことであった。以来、矢内原先生の召されるまで聖書講義も講演も籾山民子さんの速記によって残された。そのうちのある部分は、生前矢内原先生が、さらに書き直して『嘉信』その他に発表された」とある。

籾山民子は本名民、東京日本橋の生まれ。五人姉妹の長女であった。彼女も東京女子大学を一九三四（昭和九）年に卒業した忠雄の教え子である。陳茂棠編『野に匂ふ花のように―籾山民子さんの信仰と生活』（私家版、二〇〇九・一）に付された略歴によると、彼女は東

京女子大を卒業後、一時洗足高等女学校の英語の教師を務め、退職後、一九三五（昭和一〇）年に矢内原家で行われていた家庭集会（自由ヶ丘家庭集会）に出席を許され、のち久保田ちと子の仕事を引き継いだという。生涯独身を通し、信仰に厚かった。彼女は忠雄を敬愛し、その仕事を助けるのを喜びとした。彼女が忠雄の仕事にかかわったのは、忠雄が人生の最もきびしい試練の季節（とき）を迎え、東京帝国大学の教授を辞職する二ヶ月前のことである。以後、彼女は筆の人としての矢内原忠雄の手足となって献身的に働く。一九三七（昭和一二）年十月から忠雄の召される一九六一（昭和三六）年十二月までの二十四年間、彼女は助手、そして速記者とし忠雄を支えた。

籾山民子抜きに戦中・戦後のおびただしい量の矢内原忠雄の著作を考えることはできない。忠雄の話したことを、籾山民子は間違いがないよう、講義の内容をよく調べ、文章のリズムにまで気を配り、忠実に紙に書き起こした。忠雄への敬愛の念あってはじめてできうる仕事であった。そうして出来上がった初稿の文章に手を入れるのはたやすく、忠雄には楽しい作業であったろう。彼は朱筆に染まった原稿を、印刷に回したのである。『嘉信』ばかりか、家庭集会の個人雑誌『葡萄』の原稿も、こうして成った。

パソコンはおろか、携帯の録音機さえない時代のことゆえ、速記し、内容に間違いがないかを精査し、原稿に起こすのは容易ではない。速記者の教養や信仰も問われる作業であり、よほど勉強しなければ原稿の形態にすることは出来なかったろう。今井館資料館には、民子の清書した速記起こしの大量の忠雄の原稿が残されている。二〇〇字詰めの原稿用紙に記された聖書講義は、癖のない文字で記され、読みやすい。彼女は『嘉信』が『嘉信会報』と改題し、印刷所が空襲で焼けた際には、忠雄の原稿をガリ版に切り、謄写版印刷し、『嘉信』の継続刊行に力を尽くすことにもなる。

久保田ちと子と籾山民子の協力なしには、忠雄の後半生の仕事は、あり得なかったとしてよいのである。ちなみに一高同期で、法哲学者となった恒藤恭も、京大事件で辞任し、ジャーナリストとして活躍しはじめると、忙しいときには妻の雅（まさ）（雅子）や娘の百合子に原稿の清書をさせていた。忠雄の場合は、教え子のプロまがいの女性に依頼していたのである。これは忙しい忠雄の原稿作成方法としては、最適なやり方であった。自分の講義や講演が、すぐさまきれいな文字で原稿用紙に書き写されて届けられる。それを元に彼は推敲し、完全原稿に仕上げたのである。

それは師内村鑑三が、藤井武や畔上賢造というすぐれた弟子に、講演を筆録させたのにどこか似ている。先の回想記「思ひ出　四」で忠雄は、「『通信』はちと子との合作であり、『嘉信』は民子との合作であると言つてよい」と書き、「要するに私は善い助手をもつたから、自分の健康上の能力に数倍する仕事を為すことが出来たのである」とも書いている。これは誇張でも何でもなく、筆の人矢内原忠雄の真実であった。むろん忠雄のことである。彼は二人の有能な筆録者に相応の報酬を支払っていたにちがいない。が、忠雄本人も、また、『矢内原忠雄伝』を著した子息の矢内原伊作も、このことに関しては口を閉ざして語らない。

忠雄に「嘉信について―私の伝道生涯（第七回）―」（『橄欖』17、一九五五・一二）という一文がある。そこで彼は「雑誌と集会は内村鑑三先生以来無教会の伝道方法であつて、内村先生は「おれの真似をするな」と言はれたけれども、弟子たちの伝道の形式は大体この伝

統に従つて居る」と書く。近年の赤江達也『「紙上の教会」と日本近代　無教会キリスト教の歴史社会学』（岩波書店、二〇一三・六）は、資料博捜の上に立った労作であり、無教会主義の流れを「雑誌と集会」の検証を通して見ようとしたものである。矢内原忠雄の歩みもむろんこの伝統の流れの中にある。ただ、彼のばあい、量が桁違いに多く、対社会へのジャーナリスティクで批判的発言も、他の無教会主義に立つ人々に比べ、いっそう目立つ面があった。

東大退職後の矢内原忠雄は、岩波書店から出した二つの翻訳（『武士道』『奉天三十年』）と『余の尊敬する人物』の執筆のほかに、日曜日ごとの家庭集会での聖書講義と、土曜学校が主たる仕事となる。どちらも自由ヶ丘の自宅を開放してのものであった。聖書講義の方は、「イエス伝　マルコ伝による」が最初である。先に示した章立てのように、彼は「マルコによる福音書」の叙述に従って、イエスの生涯を忠実に述べようとする。よく調べ、よく考えられた講義は、説得力があった。彼は「マルコによる福音書」に書かれたイエスの生涯を忠実に語る。

その講義が高調するのは「第三章　戦闘の始」あたりからである。「イエス・キリストの御生涯は戦闘の生涯でありましたが、その戦闘はイエス様の方から挑んだのではない。彼は平和の人でありました。併し不真実な世界に真実の人間が来る時、彼は自分で真直に歩んで居るだけの事であるのに、世界は敵意を抱いて彼を眺める。イエス様は求めざるに戦闘の人たるを余儀なくせられたのであります」には、矢内原忠雄自身が当時受けた受難が重ねられているかのようだ。本書を収録した『矢内原忠雄全集』第六巻の「編集後記」には、「本書はまとまった聖書講義として公刊された最初のものであり、かつ著者みずからが序文の中で述べているとおり、日華事変の直後、職を賭した信仰の戦いの中で行なった講義として著者の戦闘的気迫が横溢しており、著者の聖書講義を代表するものの一つ」とあるが、それは初期『嘉信』の収穫であった。

「イエス伝　マルコ伝による」に並行して「アウグスチヌス『告白』講義」の連載（一九三九・三～一九四一・一一）もはじまっていた。これは土曜学校における講義をもとに連載したものであった。『嘉信』には『山上垂訓講義』もこれらに並行して載る（一九三九・九～一九四〇・七）。『嘉信』は東大教授退職後の彼の主要な活動舞台であり、敗戦に至るまでの研究と伝道の場となった。まさに矢内原忠雄の戦時中の歩みは、個人誌『嘉信』とともにあったのである。『嘉信』の危機に関しては、後節で扱うことにしたい。

他方、土曜学校は一九三九（昭和一四）年一月十四日に開講され、以後毎土曜日に自宅で行われた。『嘉信』第一巻第十二号（一九三八・一二）の「歳末雑記」に土曜学校の趣意と学校運営の簡単な規定が記されているので紹介しよう。

○今の学校は職業的技術教育の機関としては立派である。しかし真理探究の香気はますます失はれて来た。そこで私は試みに自分の学校を開いて見ようと思ふ。その特色は基督教の信仰による人格教育であることと、哲学科学文学の諸領域に亘る万有学の講義であることとに置きたい。すべて端緒は小なるを以て善しとするから、左の規定によりごく内輪に開始する。

一、名称　土曜学校

二、時間　毎週土曜日午後二時―四時（昭和十四年一月十四日

開講）
三、場所　自由ヶ丘自宅（東横線自由ヶ丘下車）
四、講義（第一期）アウガスチン『告白』、並に『神の都』
五、月謝　一月一円
六、人員　三十名以内
七、資格　嘉信読者
八、申込　住所氏名職業年齢を記し、返信料を添へ、十二月末日までに申込のこと。

土曜学校は教育者矢内原忠雄を、自ら実践によって示したものとしてよい。土曜学校の名称は、忠雄自身が名付けたという。彼は研究者であると同時に、教育者としてのよき資質に恵まれていた。天皇制ファシズムの時代に、不幸にも理想の教育の場を逐われたものの、幸いその資質までは奪われなかった。彼は東京目黒区自由ヶ丘二九二番地の自宅二階書斎を教場とし、嬉々として講義にあたった。その講義を速記し、清書した籾山民子に当時を回想した文章がある。[5] その中で籾山は「『告白』を勉強された当時の矢内原忠雄先生は、四十歳台の中ごろで、ことに第一回のお講義のときは、お心がはずまれて、冒頭のところをラテン語で読んで下さいました。お宅のお二階で、黒板をお使いになりながら、元気なお魚が大海を泳ぎ回るように、溌剌としていらっしゃいました」と書いている。忠雄は根っからの教師であったのだ。

大学の教壇を離れて一年、教えることの好きな彼は、まさに水を得た魚のようであった。神戸一中・一高以来、彼は常に人の先に立ち、人を引っ張るのに才を示した。彼には人を教導する天賦の才が備わっていた。それが時に、他者には目ざわりな存在に写ることがあり、一高時代には倉田百三から「生活批評――矢内原忠雄君にあたふ」（『校友会雑誌』第二二七号、一九一三・六・一五）という批判さえ受けたこともある（「第三章　向陵の青春」で詳説した）。が、若き日の気障と思われた態度も、きびしい時代の風雪の中で鍛えられ、次第に彼の自然の所作と化し、そうした能力が東大在職中は講義やゼミの指導に、そして辞任後は家庭集会や土曜学校での指導において発揮されることになる。彼の教育者としての力量が最も問われるのは、第二次世界大戦後東大に戻り、経済学部長や教養学部長、そして総長として学生運動の集団と対決・指導に当たった時期である。それは次章（第十一章）で扱うところだ。

「アウグスチヌス『告白』講義」の冒頭に、矢内原忠雄は「開講の辞」を載せている。後半部の箇所を引用する。

ここに我らはささやかなる土曜学校の講筵を開く。規模は小なりといへども志は大である。我らの学ばんとするは、哲学及び科学の全領域に亙る古来の偉大な思想と学問とである。その根本精神である。人我らを笑つて誇大妄想といはんか。我らも亦自ら拈華微笑（ねんげみしょう）して永遠の生命を指さんのみ。

我らは先づアウグスチヌスの『告白』を学ばうとする。『告白』は「人」とは何であるかについて、我らを教へるであらう。アウグスチヌスが『告白』を書いたのは、満四十六歳の年であつた。それは正に今年の私自身の齢である。能力と素養とに於いて私はもちろんアウグスチヌスの足下にも寄りつけない。併しながら半生を回顧して神の恩寵を讃美し、地上に残る生涯を

挙げて神の真理の証明のために働かうといふ志は、ヒッポの監督と異らないであらう。

忠雄は土曜学校の講義を毎回、祈祷をもってはじめ、祈祷をもって終えた。彼は真理探究の意気に燃えて講義に臨んだ。土曜学校ではアウグスチヌス講義に続き、ダンテの『神曲』、ミルトンの『楽園喪失』の講義が続いた。それらは籾山民子という優れた筆記者によって厖大な量の原稿として残された。「アウグスチヌス『告白』講義」のみは、早く教文館から一九四三（昭和一八）年十月一日の日付で刊行され、全集にも収録された。その後、矢内原伊作・藤田若雄編集の『土曜学校講義』全十巻が、全集とは別にみすず書房から刊行（一九六八・六～一九七二・二）されている。それを手にすると、膨大な量の講義録に圧倒される。どの巻も決してかいなでのものではない。

なお、アダム・スミスの『国富論』の講義は、すでに述べたところであるが、忠雄が速記を拒否したので、活字としては残らなかった。アダム・スミスは忠雄の慕うイギリスの経済学者であり、イギリス留学時代には、その墓参りまでしていたことは、第六章の二でふれている。戦中の彼は、いまだ十分熟さない講義を記録に残したくなかったのであろう。ともあれ、彼が西洋古典を重視したのは、その解釈の方法や技術を学ぶことに意義を見出したからであった。矢内原忠雄は、壊れやすい社会を支え得るのはなにか、という不可避の問の中で、〈聖書と西洋古典〉を学ぶことの意義を見出していたのである。聖書研究と西洋古典の学習は、戦時中の矢内原忠雄にとって、車の両輪と化していた。

柴田真希都の「伝道者・牧会者・聖書研究者」[6]は、忠雄の土曜学校での講義をとりあげ、「おしなべて時局に同調するかのような学問言説が林立する時代において、静かに着実に真理への探究にいそしむことを旨とするものであった。さらにキリスト教の立場から、言論において時代思潮へ立ち向かい、現実を越える希望を失わなかった先達たちの姿勢に学ぶことが意図されていた」とする。土曜学校での地味ながら着実な講義は、忠雄にとっては時局への批判でもあったのだ。それは戦時下抵抗の一典型として高く評価できるものなのである。このことは特筆しておきたい。

土曜学校は一九三九（昭和一四）年一月十四日にはじまり、一九四七（昭和二二）年五月十八日まで続く。太平洋戦争前夜から敗戦までの時期、矢内原忠雄は孜孜として、アウグスチヌスの『告白』にはじまる講義に当たった。東大を追われた忠雄は、家庭集会での聖書研究、土曜学校での古典研究の準備などで、相変わらず忙しかった。そうした中にあって、速記を担当した籾山民子の文章は、きわめて的確、それが矢内原家に届けられると、忠雄は封を切るや、すぐさま朱筆を入れ、完成稿にして『嘉信』に載せた。

他方、一九三八（昭和一三）年四月から、忠雄はお茶の水の女子基督教青年会館で、月一回の公開聖書講義をはじめるが、その記録も『嘉信』に載り、のち『矢内原忠雄全集』第八巻に「ガラテヤ書講義」「エペソ書三講」「ピリピ書三講」として収録された。以後も、戦時中の矢内原忠雄の活動とその記録の多くは、『嘉信』に載る。同年（一九三八）七月には、第一回山中湖畔聖書研究会が開かれ、「山上の垂訓」「ダニエル書」などを講じ、これらも『嘉信』に遺された。

『嘉信』刊行と並行して忠雄は、前にふれたように『藤井武全集』の再刊に乗り出していた。旧版は塚本虎二との共同編集であったが、塚本の諒解のもと、今度は忠雄一人の単独編集となった。『嘉信』第一巻第三号（一九三八・三）に、「『藤井武全集』再刊に就て」[7]が載っている。その前文は忠雄の再刊への強い意気が感じられるものなので、引用しよう。

その人格の真実さ、信仰の深さ、文章の清さに於て、藤井武は今日こそ多くの世人が知らないけれども、必ず後世に残り、世界に伝はるべき思想家である。彼の全集は絶版である為め、人之を求めて得ず、極めて稀に古本屋に出づれば原価に数倍する高価を呼んだ。それで私もこれの再刊は或は社会に対する義務ではあるまいかと薄々思ふ様になつて居たが、最初の刊行が私の健康、時間、労力に課した苦痛の記憶が未だ去らざる為め、之を再びする勇気は到底無く誰か私に代り責任を有ちて刊行の任に当つてくれる人の出現を待つのみであつた。

然るに図らずも昨年暮私は大学を辞職して身体が自由になつたので、右の責任を辞する最大の口実を失つた様に感じた。その後祈祷と熟慮数十日を経て、遂に左の如く再刊の具体的計画を発表することに決したのである。願くは神の恩恵と諸君の応援とによりて、此の事業の支障なく成就せられんことを。

刊行元は目黒区自由ヶ丘二九二の忠雄の自宅に置く「藤井武全集刊行会」である。再刊の動機は種々あるが、「類稀なる真実の人格、真実の信仰、かくの如き人物が現代の日本に居たことは一の奇蹟である。私は今彼の全集の再刊を企てて居る。彼をして自ら語らしめよ。之は畑の中に秘められたる宝である事を、後世の人は益〻知るであらう」（『嘉信』第一巻第八号、一九三八・八）と記すところが第一であり、他には再刊による多少の利益が、藤井の五人の遺児の養育費の一部になるのではないかという計算もあった。矢内原忠雄がいかに藤井武の遺族一家のために尽したかは、武の子息藤井立の「叔父の想い出」[8]に詳しく記されている。右に引用した「『藤井武全集』再刊に就て」にもあるように、藤井全集は絶版であり、古本屋では「原価に数倍する高価」なものとなっていたことから、一定の採算見込みもあったに違いない。けれども、ここでも「検閲」という大きな壁が立ちふさがった。

日中戦争の激化とともに内務省の検閲も厳しさを増していたのである。彼は全集から「唯物史観の研究及び批判」を除き、『ロマ書研究』の第九「神の絶対主権」を「神の絶対権」に直すなどの手当をすることで乗り越えている。「藤井武全集の完了」（『嘉信』第三巻第六号、一九四〇・六）には、その苦労が次のように述べられている。

検閲の方は、始めから私が一身に責任を負ふつもりであつたが、昨年夏更に決心を新にする必要の時が来て、心騒ぎて平安を得ず、忘れもせぬ九月十二日、日蓮隠遁の地たる身延山を訪れ、薄暮杉林の中に立ちて祈つた。而して「仏教の日蓮でさへ恐れなかつたことを、基督を信ずる者が怖れることはない」。その声が私の心を全く静かならしめた。

時代がますます反動化・ファッショ化する中で、日本のキリスト

教界は、その流れに抗することができず、黙認どころか、流れに棹さす面すらあった。南京大虐殺が起こったのは、忠雄の大学辞任の一九三七（昭和一二）年十二月であり、日本の各派キリスト教会は、それに何らの抗議の声も挙げられなかったのである。それどころか二年後の一九三九（昭和一四）年十一月三日（筆者注、旧明治節）に開かれた東京青山での「基督教徒大会」では南京占拠の最高指揮官松井石根陸軍大将（筆者注、松井は戦後東京裁判で、A級戦犯となり、処刑された）を迎え、出席していたキリスト者全員が起立して迎え、挨拶をさせるという愚行まで行っていた。忠雄はそれに対し、同年十一月二十六日に行ったお茶の水の女子基督教青年会館での「第二イザヤ書講義」の中で取り上げ、きびしく断罪する。『嘉信』第三巻第一号（一九四〇・一）に載った「政治的解放者と霊的解放者―第二イザヤ書講義第三講」に見られる忠雄の歎きを、以下に引用する。

去る十一月三日東京青山にて基督教徒大会なるものが開かれ、午前には基督教講演があり、午後には文部省宗教局長の講演を聴き、且つ某陸軍大将の挨拶に先だち司会者は大将閣下の臨席を非常に光栄とし、一同特に起立して大将を壇上にお迎へする事を要求した。それで一同起立したといふことである。

この局長や大将は、現代社会の基督者に対する解放者としてこの席に来たか。否、決してさうではない。その陸軍大将は南京事件当時の最高指揮官であつた。南京陥落の時に、アメリカのミッションで建ててゐる基督教の女学校に対して、一つの大きな間違が犯された。そのことが報道されて、外国殊にアメリカの排日的感情に油がそそがれたのである。若しもさういふ事実を基督教徒大会の主催者が知らなかつたとするならば、之は甚しき怠慢である。知つてゐたとするならば、何といふ厚顔無恥であるか。その事件の責任者たる者は、手をついて基督教会の前に謝らなければならない。基督教徒大会は、日本の基督教徒の名に於いて謝罪を要求すべきではないであらうか。それを全会衆が起立して迎へるとは、之ほど逆さまの事がありますか。誰かわが僕の如き盲目あらんや。聾者あらんや、基督教会ほど盲はありません、聾者もありません。そんな逆さまの事が今日基督教徒大会の名に於いて行はれたといふことを聞くのは、私は目で見た以上になさけなく思ひました。

時代の嵐の中で、日本のキリスト者も翻弄され、戦争協力に走り、それを当たり前のように思っていたのである。が、矢内原忠雄の眼は、曇りなく、ひとり冴えていた。彼は世の動向を思うに付け、腹立たしい思いは消えなかった。それが時に妻や子らへの八つ当たりともなるのであった。

一九三八（昭和一三）年四月、忠雄の長男伊作は、一高理科から父忠雄の反対を押し切り、京都帝国大学文学部哲学科へ進学した。伊作は西田幾多郎門下の少壮哲学者の集う京大文学部にあこがれると同時に、ますます「こわい」存在となった父から離れたくて、京都での生活を選んだのである。ついでに他の子らの消息に触れると、次男光雄は当時中学生、翌々年の一九四〇（昭和一五）年、明治学院高等商学部に入学している。後妻の恵子との間に生まれた三男勝は小学生、のち府立一中を経て、慶應義塾大学経済学部に進む。

戦中の忠雄は子どもたちにとっては、「こわい」父であった。それはすでに述べたように、南原繁他編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』（岩波書店、一九六八・八）収録の光男や勝の回想記や伊作の『若き日の日記　われ山に向ひて』（現代評論社、一九七四・五）が、口をそろえて言っていることでもある。

二　朝鮮訪問と「ロマ書」講義

一九四〇（昭和一五）年八月二十二日、矢内原忠雄は東京を発ち、朝鮮訪問の旅に向った。『嘉信』第三巻第三号（一九四〇・三）に忠雄は、「神若し許し給はば今年八月下旬より九月中旬に至り、朝鮮へ伝道旅行をしたいと考へて居ます。詳細は他日発表の機会がありませう。私の夢は朝鮮、満州、台湾、支那、米国への伝道旅行であります」と書いていたが、その一部が実現したのであった。長男伊作、故藤井武の息子で、忠雄が保護者となっていた藤井立、それに書記として籾山民子が同道した。伊作は京都帝国大学文学部哲学科の学生、藤井立は東京帝国大学経済学部の学生であった。

朝鮮は忠雄の若き日からの関心の深い地であった。大学時代に講義を受けた吉野作造の著作のあらかたに目を通し、その「朝鮮論」に触れていたことは、すでに第五章の一で述べた。なお、最近の中村稔『私の日韓歴史認識』（青土社、二〇一五・七）には、「吉野作造『朝鮮論』」の章があり、参考になる。忠雄の朝鮮に関する著作は、吉野張りの朝鮮総督府を批判的な眼で捉えるものが多い。日本が植民地とした一九一〇（明治四三）年以降の朝鮮を、特にその統治の間違いを、この頃忠雄は、しばしば『嘉信』で取り上げていた。「朝鮮基督教会に関する事実」（『嘉信』一九三八・八）や「同化政策」（『嘉信』一九四〇・三）が相当する。彼は早く、三・一独立運動を専制政治に対しての民衆の「不信任」（「朝鮮統治の方針」『中央公論』一九二六・六）として、朝鮮の人々に同情を示していたが、この時期には一歩進んで、同化政策を強い批判の対象とするようになる。

「朝鮮統治上の二、三の問題」（『国家学会雑誌』一九三八・一）では、日本政府の同化主義政策に対し、「同化主義により果して善く朝鮮人を日本人化し得べきや否や」との問を発する。彼は「同化主義の植民地統治は軍隊及び警察的監視の下においてのみ行はれる」として、朝鮮総督府の同化主義政策をきびしく批判する。忠雄は朝鮮人に対する伝道を自己の責務とも考えていた。彼には植民政策研究から知り得たこうした知識があり、朝鮮の人々の窮状を知るだけに、彼らへの伝道への思いは深かった。

ところで、矢内原忠雄の朝鮮訪問の膳立てをしたのは、ソウルに住むアララギ派の歌人で、当時、朝鮮総督府財務局に勤めていた村山道雄であった。村山は忠雄の神戸一中の後輩に当たるキリスト者であった。彼は忠雄の朝鮮訪問の希望を聞くや、その実現に向けて、何かと奔走することになる。村山道雄は第二次世界大戦後、山形県知事や参議院議員を勤めるという政治家の資質に恵まれた人物であった。一九四〇（昭和一五）年七月三十日付山梨県山中湖畔より京城府旭町一丁目官舎十九号、村山道雄宛忠雄書簡があり、『矢内原忠雄全集』第二十九巻に収録されていて参考になる。そこには旅行日程も記されている。

八月二十二日東京を出発した忠雄と伊作・藤井立の三人は、下関

から連絡船に乗り、二十三日釜山に着く。書記の籾山民子は遅れて出発し、のちソウルで合流した。八月二十四日、忠雄は日本基督教会釜山教会で、「基督教の論理と倫理」と題して講演する。言語は日本語である。植民地下の朝鮮では、日本語が強制されていたから、現地の朝鮮の人々も日本語が理解できたのだ。二十六日は、慶州へ。慶州は紀元前五十七年から九三五年まで、新羅の首都として栄えた都市である。点在する古墳と寺、そして栄華を誇った時代の遺物に、古都の趣を残す。忠雄は大学時代に朝鮮と日本のかけはしになろうと考えたこともあって、この国の文化と人々に愛着を持っていた。それゆえ慶州は、第一に訪問したい都市であった。

二十七日は、慶州の中心から十六キロメートルほどのところにある仏国寺を見学、山の斜面に立つ大伽藍に心をうばわれる。その夜は慶州の西約五十五キロメートルの大邱に泊まる。大邱は十六年前の一九二四（大正一三）年にも来ており、二度目のことであった。そこで市内見学などはせず、翌二十八日は、早朝大邱を発ち、列車で平壌に移動した。その夜は、監理教会でエペソ書二章十一～十二節を用いて講演をする。「平壌では鮮人関係だけの講演会をしたが、之は後で関係者がケイサツへ呼ばれ、又僕のところへもやつて来たが、大した事でなく済みさうである」（一九四〇・八・二九、矢内原恵子宛）との書簡が残っている。二十九日は金剛山を視察し、九月一日の日曜日は、午前は咸興の集会で鮮人に、夜は興南のメソジスト教会で一般の人々に講演をした。九月四日は元山に行き、以後南下して七日ソウルに着く。ソウルでは総督府官吏宿舎の村上道雄宅に十日まで滞在して、十一日からはＹＭＣＡのアパートに移った。きびしい警察の眼の光るソウルでの宿泊先について川中子義勝は、「植民地政府の懐深く入り込んでしまうことによってかえって難無きを得た」[9]と言う。

いつものことだが矢内原忠雄の旅は、無駄なく、強行軍である。が、若き日のヨーロッパやアメリカでの旅とは異なり、彼はすでに四十七歳、体力的には厳しかった。書簡には「毎日疲れて旅をしてゐる」（矢内原恵子宛、一九四〇・八・二九付）の文字も見られるようになる。ソウルでは九月八日に組合教会などで講演、九日は村上道雄と当地の神戸一中同窓会に出席した後、京城基督教青年会館で「ロマ書」の講義をする。以後五日間に及ぶ講義の開始であった。後年矢内原忠雄は『聖書講義2ロマ書』（角川書店、一九四九・二）を刊行するが、この時の講義が基になっている。その「序」で、忠雄は以下のように記す。

私は一九四〇年九月の初め朝鮮に渡り、京城のキリスト教青年会館で日本人及び朝鮮人の混合した会衆にむかつて、五日間にわたりロマ書の講義をした。当時朝鮮はいはゆる「皇民化」運動の渦中にあり、キリスト教の伝道は弾圧の下に置かれてゐた。殊に私自身は、私の思想と言論の故に、総督府の歓迎せざる人物の一人であつた。それ故に私の友人である一人の総督府官吏は、私に対する警察の監視を避けさせるために、私の京城滞在中私をその官舎に宿らせたのである。

かかる状況の下に私が朝鮮に渡つた事は、いくらか身辺の危険の予期せられなかつたことではなく、私として決心を要した事柄であつた。併しキリストの愛が強く私に迫つて、警察政治の弾圧下にある朝鮮の人々に対し、個人の救と民族の救につい

てキリストの福音を宣べ伝へることを圧倒的な使命と感ぜしめた。それ故に私は「異邦人の使徒」と自らを称したパウロのロマ書を携へて、朝鮮海峡を渡つたのであり、五日間にわたつてこれを講じた時、私の血管の中の一ドランマの血液もキリストの熱心に燃えざるものはなかつたのである。本書に収めた「ロマ書講義」はこの京城講演の速記に基いて執筆したものであり、嘗て私の個人雑誌である『嘉信』に連載せられたものである。

右の文中の「私の友人である一人の総督府官吏」が村上道雄であることは、言うまでもないことである。すでに記したように「ロマ書」（「ローマの信徒への手紙」）は、恩師内村鑑三が『羅馬（ロマ）書の研究』を、そして彼の周辺の人々では、黒崎幸吉が『註解新約聖書・ロマ書』を、畔上賢造が『ロマ書註解』を、金沢常雄が『ロマ書講解』を刊行していた。他にも山谷省吾が『新訳と評釈・ロマ書』を、中川景輝（かげき）が『ロマ書の精神』を出していた。

そうした中で「ロマ書」をあえてとりあげる必然性を、忠雄は「ロマ書講義」はしがき」（『嘉信』第四巻第一号、一九四一・一）で、「過去の宗教改革はすべてロマ書から始まつた。現代の宗教改革も亦ロマ書を以て始めることによつてのみ、行はれ得るものと私は信ずるのである」と述べている。忠雄は一九四〇（昭和一五）年九月九日から十三日までの五日間、鐘路にある京城基督教青年会館（現、ソウルキリスト教青年会館）で講義をした。それを忠雄言うところの「私の忠実なる速記者」籾山民子が記録する。内村鑑三の『羅馬書の研究』が、畔上賢造というよき門下生を得て成ったように、矢内原忠雄の『聖書講義2ロマ書』も、籾山民子という彼を慕う速記者がいてのことであった。

講義は毎日の夕方、七時からはじまった。村山道雄の回想「昭和十五年京城聖書講習会の想い出」[10]によると、「はじめは定員七十名とするつもりで会員を募集されたが、申込人員がこれをはるかに超過して結局百四、五十名に達した。その内約三分の二が朝鮮人、三分の一が内地人であった。京城はもちろん北は鴨緑江、南は釜山に至る朝鮮各地の人々が集り、満洲の吉林や大連、内地の東京からも来会するものもあって先生も感動された様子であった」という。内容は前述の角川書店版『聖書講義2ロマ書』やそれを底本とした『矢内原忠雄全集』第八巻に見ることができる。講義の調子を知るために、冒頭の部分を左に引用しよう。

どなたもお聞き下さい。問題は「救の原理とその適用」であります。耳のある人は聴いて頂きたい。この講義は一つの譬話であります。

この書の著者は使徒パウロであります。彼は小アジアのタルソに生れた一人のユダヤ人であります。タルソといふところは、当時エジプトのアレキサンドリヤに次いで、ギリシャ・ロマの文化の中心地でありました。其所に生れて成長したパウロは、エルサレムに参りまして、碩学ガマリエルの門に学んで、ユダヤの律法を修めたのであります。彼は生れながらのロマの市民権を有つてゐたものでありまして、彼の父でありますか、祖父でありますか、市民権をロマから与へられてゐたのであります。この様に、ユダヤ教の精髄、ギリシャ文化の教養、そし

てロマの市民権、この三つのものがパウロに集つたのであります。御承知の通り彼は青年時代、激しき基督教の迫害者でありました。ステパノを石で撃つたとき、背後にあつて之を煽動した者は彼でありました。かかる人間を神様は捉へたまうて、キリストの僕となしたまうたのであります。

非常にわかりやすい、しかも格調高い導入である。このような導入による「第一章　序論」にはじまり、「第二章　罪の問題」「第三章　義の問題」「第四章　潔の問題」「第五章　選の問題」「第六章　徳の問題」「第七章　結語」と続く。恩師内村鑑三の『羅馬書の研究』は、「第一講　羅馬書の大意」にはじまり、「第六十講　羅馬書大観」に終わるが、忠雄の場合は五日間という講義日程の制限もあり、七章にコンパクトにまとめられている。『嘉信』に載った「ロマ書講義」は、ソウルの講義が主体とはいえ、山中湖畔での聖書講習会や、お茶の水の基督教女子青年会館で行った講義で補強している。

「第七章　結語」には、「内村鑑三先生はロマ書の構造を建物に譬へて、表門あり、廊下あり、本館三棟あり、裏門あり、而してロマ書を研究するのは、恰もこの一大建築物を表門より入りて裏門に出るまで巡覧するやうなものであると言はれましたが、私は之を登山に喩へました」とあり、まとめに入る。「ロマ書」の構造を、「大建築物」（大伽藍、大殿堂）にたとえたのは、内村鑑三の独擅場であるが、矢内原忠雄は「登山」にたとえたのである。

その述べるところに従うなら、あいさつ（一・一～一七）という麓から登りはじめて、日常生活での「罪の問題」という裾野を経て、「義の問題」「潔の問題」「選の問題」という三高峰の項を窮める。その後、実際生活上における「徳の問題」という「長い美しい裾野」を下り、麓の平地に立つ。それが十五章十四節以下のあいさつに相当するという。彼はパウロがこの手紙を書いたわけを述べ、神が異邦人への使者としてパウロを立てた、そこに使命が生じたからだとする。パウロは異邦人への伝道を特別の使命と考え、ローマへ行ってキリストの福音を伝えたい、そこで近くイスパニアへ行く途中に、ローマに寄ることを知らせた（一五・二二―二三）。忠雄は、パウロがまだ見ぬローマの教会に対し、いかに暖かい親愛の情を抱いているかが、紙面に躍動しているとする。十六章は個人個人についてのあいさつである。

ローマ人もいればユダヤ人もいる。奴隷の所有者もいれば奴隷もいる。ギリシャ名の人もいればローマ名の人もいる。男もいれば女もいる。パウロはそのすべての人々に対して、一様に主にある兄弟としての暖かい愛を注ぎ、一人一人、その特徴と長所を挙げて安否を問うている、それを忠雄は、「実に美しい信仰の交であります」という。さらに「そこにはもはやユダヤ人もなく異邦人もなく、自主もなく、すべて主にありて新に生れた者としての兄弟姉妹であります。殊に婦人の名と奴隷の名の多いのが著しく目につきます。ここに従来の世界と異るところの全く新なる一つの社会が生れて居る。それが「義と平和と精霊によれる歓喜」の神の国であるのです」という。矢内原忠雄は「ロマ書」を「雄大な手紙」と言う。

角川書店版『聖書講義2ロマ書』には、「附」として「終講の辞　一九四〇年九月十三日京城に於けるロマ書講義の終講に際して。（速記）」が収められている。忠雄の言いたかったことの骨子を抜き書きしよ

う。

○ロマ書十六章を僅か五回の講義でもつてお話することは、或る意味に於いて非常に冒険でありまして、大変急いで大変大切な問題を述べましたから、諸君の御諒解に不便であつたかもしれません。けれども、けれども、この私としてはロマ書の全体をお話したいと思つて参つたのでありまして、ほぼ其の目的を達する事が出来ました。自分の言ひ度いと思ふ事は凡て申しました。

○私は朝鮮に来まして、皆さんに聖書を講義することの出来る日を本当に待つてをりました。その日の与へられる事を実に長く待つてゐたのでありましたが、パウロではありませんが、多くの事に邪魔されてそれが出来ませんでした。今度は神様の許しによつて、その事が許された。

○私が大学を辞めた事を悲しまないで下さい。悲しまないでいいんです。私は今でも学問を愛し、自分のした学問を愛してをります。けれども、神様はもつと広い、もつと高い、もっと深いものを私にお与へ下すつた。私は、植民政策といふ学問をもつて諸君の前に立つ事は出来ませんでした。併しながら、それ以上のものをもつて、それよりも大切なもの、それよりも永遠的なものをもつて、諸君の前に立つ事が出来た。立つ様に、神様からさせられたのであります。之は悲しむべき事ではなくして、むしろ神様の為したまふところの、神の智慧、神の富、神の恩恵は測り難きかな。かう言はざるを得ません。

○多くの私の友人どもは、この講座の為めに本当に祈つてくれました。遠き所は日本の東京から、また満洲の吉林から、大連から、朝鮮内でいへば、南は釜山から北は鴨緑江から、各地からここに出席し、私を助け、私を守り、私の話を聴いてくれた。況んや電報とか手紙とか、それから祈を以て私を沢山の人が助けてくれたのでありまして、いはば之は天の使たちが私を守つたと等しきものである。

速記を起こしたものながら、文章は無駄なく、張り詰めている。忠雄は「我は福音を恥とせず」という短いフレーズの中に、パウロの全生涯が入っていることを確信を持って指摘する。彼は「序論」の最後で、「神の義の成就せられる途は、神の側からいふと恩恵、人からいふと信仰。恩恵より始まつて恩恵に進む。信仰より始まつて信仰に進む。之がロマ書の脊髄骨であります」と言う。分かりやすいことばで以下「罪の問題」から「徳の問題」までを詳説するのである。

忠雄はロマ書を語ることで、当時の日本をめぐる東アジア問題に眼を向ける。その意味では講義は、誤った道を歩む帝国主義日本の「譬話」ともなる。藤田若雄は忠雄のソウル講演に関して、「矢内原がロマ書によって述べたことは、日本の敗戦によって証明された。矢内原は、日本の植民地研究で朝鮮を書かなかった。いや書くことができなかった。しかし、このとき彼の考えを明白に人びとの前で述べたのである」[11]と言う。ソウル講演は矢内原忠雄にとって大きな意味を持っていたのである。それは「ロマ書」の現代的意義の確認でもあった。

三　弾圧と抵抗

一九四〇（昭和一五）年一月二十七日に、矢内原忠雄は四十七歳の誕生日を迎えていた。時代は日中戦争の最中、太平洋戦争の前夜に当たる。大学を追われて二年余、相変わらず彼は忙しく暮らしていた。休んではいられないとの思いが彼を駆った。時代の緊迫する中で、彼はひたすら努力し、前進する。

翌年十二月八日の太平洋戦争を前に、日本はこの年（一九四〇）九月二十七日、日・独・伊三国軍事同盟に調印する。国民統制組織の大政翼賛会発会式が行われたのは、十月十二日のことであった。矢内原忠雄に引きつけて言うと、彼は前々からヒットラーのナチスを戒め、理想なく、欲望のままに走るドイツを批判していた。「国家の理想」で忠雄は、国は理想を求めることが大事で、他国を侵略することではないと主張した。この年は、各地での内村鑑三昇天第十年記念講演会（四～五月）をはじめ、藤井武全集完成晩餐会（六・一四）、同十周年記念基督教講演会（一〇・一）などのほか、日本各地と朝鮮での講演旅行の敢行など、忠雄は何かと忙しい日々を送った。

『嘉信』第三巻第十二号（一九四〇・一二）の「『嘉信』短言」に彼は、「見よ、四月大阪京都名古屋の戦、五月仙台の戦、七月山中湖、九月朝鮮、十月東京、十一月西宮。いくたびか危機を孕んだ。併しながら到る所神の守護は鮮（あざや）かであり、奇蹟は度々行はれたのであつた。まことに古の詩人の歌へる如く、我が世にあらん限りはかならず恩恵と憐憫と我にそひ来るであらう」と書く。右のうち仙台というのは、五月二十九日の仙台聖書研究会主催の講演、山中湖というのは、七月二十日から二十五日までの第三回山中湖畔聖書講習会、十一月西宮というのは、関西学院での講演をさす。彼は神の守護のもと、東奔西走の充実した伝道生活を送っていたことになる。

長期化した戦争を背景に、彼は国の将来を思い、憂えていた。政府は国民にひたすら耐乏生活を強いる一方で、見通しのない戦争に苦慮していたのである。『嘉信』第一巻第二号（一九三八・二）の「短言」に彼は次のような連作短歌を載せている。

ひたむきに国を思ひて歩みしが到れる見ればこれの荒野か

冬枯の多摩の川原に居つくして入日見つむるわが身となりぬ

東京帝国大学教授の肩書をすてて見放（さ）くる天は広しも

踏み入るる途は荒野かさもあらばあれ主（きみ）に寄り添ひ心足らひぬ

矢内原忠雄は文学の才に恵まれ、短歌もものした。現在、彼の詩歌は『矢内原忠雄全集』第十七巻にほぼ収録されている。同じ内村鑑三門下の南原繁には『形相（けいそう）』（創元社、一九四八・三）という歌集があることは、広く知られている。今は岩波文庫にも収録されているので、簡単に手にすることができる。南原の「「兵に告ぐ」と戒厳司令官の声いへどわれの心に徹（とほ）らざるものあり」の一首は、二・二六事件に取材した作である。南原は一方で、「さもあればあれわれ神を信じつつありのままなる命を遂げむ」という、信仰に立ったう

たを同じ年に詠んでいる。内村鑑三の門下生には、小山内薫・有島武郎・正宗白鳥・志賀直哉・鶴見祐輔・藤井武・三谷隆正ら文学的才能に恵まれた人が多くいたが、矢内原忠雄もその一人であったことは、これまでもしばしば言及した。忠雄にも二・二六事件に取材した歌がある。「誰人をうたんとはせし砲兵か／帰るをみれば涙したぎる」である。右に掲げた短歌の一、二首については、第二次世界大戦後、忠雄自身が解説した文章「私の歌」（『文藝春秋』一九五八・二）があることも記しておきたい。

それによれば、最初の「ひたむきに」の歌の「到れる見れば」は、「私自身の到達した境遇を意味するのか、それとも私の憂いた滅亡・廃墟を予見させる事態に国が到達したというのか、歌としてはあいまいであるかもしれぬが、私の意味したところはこの両者共であって、私の辞職は国の滅亡の象徴のように思われたのであった」とのことである。また、「冬枯の」の歌には、「私は朝から夕方おそくまで研究室に残っていて、ゆっくり好きな散歩をする時間もなかった。それが急にひまになって、終日多摩川の枯草の中にねころび、秩父連山のかなたに沈む冬の入日を心ゆくまでながめる身になった。これは自分の境遇の変化を悲しむあわれな歌のつもりではなく、時勢をなげく気概とともに自分の自由をよろこんだ意味であるが、読む人にはどのように受取られるであろうか。本当の歌を作ることはむつかしいものだ、ということがわかる」とある。彼は右の連作短歌の第四首にあるように、「踏み入るる途は荒野」であろうと、きびしい昭和十年代を良心的知識人として、弾圧に屈することなく、自己の信念に基づく生活を送るのであった。

世界の情勢が緊迫化する中で、日本では宗教団体法の施行に伴い、プロテスタント教会の合同が進められ、一九四一（昭和一六）年六月、三十余の教派が合併し、日本基督教団が成立する。そうした下で、日本的キリスト教の研究が奨励された。赤江達也は『「紙上の教会」と日本近代　無教会キリスト教の歴史社会学』[12]で、無教会主義は、「その〈精神性〉や〈純粋さ〉において、日本基督教団のものとは区別されてきた。その精神性の高さにおいて、あるいは制度制の欠如において、異なるとされるのである」と客観的評価を下す。矢内原忠雄は時局に流されることなく、聖書研究を中心とした信仰に立って、困難な時代を生きようとした。無教会の「制度制の欠如」は、教派合同、合併の流れからは無縁とされ、この場合プラスに働いた。

一九四一（昭和一六）年六月二十二日、独ソ開戦。同年十二月八日、日本はハワイ真珠湾の奇襲攻撃によって、アメリカ・イギリス・オランダをはじめとする連合国との戦争を開始する。宣戦布告四日後の十二月十二日の閣議では、「支那事変をも含め大東亜戦争と称呼する」ことが決定され、日本は「大東亜共栄圏建設」という美名のもとに、陸海軍諸部隊が一斉に軍事行動を起こす。近年の吉田裕『アジア・太平洋戦争』[13]から引用する。

> 一九四一（昭和一六）年一二月八日、日本陸海軍の諸部隊は、いっせいに行動をおこした。日本軍の作戦計画では、開戦と同時に、マレー半島とフィリピンに進攻して両地域を占領し、その後、東西からまわりこむようにしてボルネオ・セレベス・スマトラ島を攻略、最後に蘭領（オランダ領インドネシア）の中心であるジャワ島を占領して、蘭領の石油資源を手に

入れるという計画だった。この南方作戦の主役は、海軍の支援をうけた陸軍の諸部隊である。（中略）

他方、海軍の場合、最大の作戦は、四一年一二月八日の真珠湾攻撃である。六隻の正規空母を集中使用したこの奇襲攻撃によって、日本海軍はアメリカ太平洋艦隊の戦艦群に致命的な打撃を与え、太平洋艦隊による南方作戦の阻止行動を不可能にした。しかし、アメリカの空母群は、真珠湾に在泊していなかったため攻撃を免れ、主力艦や飛行場への攻撃だけを重視して、ドッグや石油タンクなどへの攻撃を疎かにしたため、真珠湾の基地機能に大きな打撃を与えることはできなかった。また、交渉打ち切り通告前の奇襲攻撃は、「だまし討ち」としてアメリカ国民の憤激を買い、孤立主義的な空気の強かった世論を一変させた。これによりアメリカ国民は、第二次世界大戦へのアメリカの参戦を強く支持するようになった。政治的には、この奇襲攻撃は、アメリカ国民の結束をかためさせたのである。（中略）

開戦と同時に中国戦線の日本軍は、抗日運動の拠点となっていた上海などの租界を接収するとともに、香港攻略戦を開始し、四一年一二月末には、同地を占領した。同時に、香港攻略戦に策応するため、一二月下旬からは第二次長沙作戦が開始され、中国軍の激しい抵抗を排して長沙に進入したが、逆に中国軍によって包囲され、撤退を余儀なくされる。悪戦苦闘の末、日本軍は原駐地に帰還したが、この第二次長沙作戦は、中国軍の戦力と戦意には、あなどりがたいものがあることを示したのである。

戦争の初期作戦は、大本営発表という虚偽の報道もあり、日本軍の圧勝のように見えた。日本軍は東南アジアと太平洋の広大な地域を占領し、国民は勝利に酔うことになる。が、事実は現地民の抵抗もあって、どの戦線もきびしい状況にあった。こうした中で、矢内原忠雄はお茶の水公開聖書講義、日曜家庭集会、そして土曜学校、さらには毎夏の山中湖畔聖書研究会を誠実にこなしていた。彼には聖書研究に徹し、西洋古典に学ぶことが、時局との対決・批判であることが解っていた。しかも、植民地研究を専門とした彼には、日本の帝国主義的支配が占領地で長続きしないことも予見できた。

早くお茶の水公開聖書講義[14]で、彼は「或る人が私に言ひますのに、「貴方は時局問題に就てもつと言つたらどうですか」。――言つたではありませんか。満洲事変の最初から言つて来たではありませんか。言つたけれども、人が聞かなかつた。山の上から大きな勢を以て転がつて来た石は或る処迄往かなければ止まらないものと見える。それを途中で止めようと思つて身を投げ出した者は、或は死に或は傷つき、或ははね飛ばされました。今はただその石が往きつく処まで転がつて往くのを、見まもつてゐるだけであります」と語っていた。彼は当初はストレートな言い方で時局批判をした。「藤井武満七年記念講演会」での講演（『通信』四十七号、一九三七・一〇）中の「日本の理想を生かすために一先づこの国を葬つて下さい」のことばなど最たるものだ。が、その講演を載せた号が発売禁止処分を受け、続いて『帝国主義下の台湾』と『満洲問題』が増刷禁止に、『民族と国家』と『民族と平和』が、これまた発売禁止処分になる。

出版法や新聞紙法による検閲は、多くの文学者や思想家を長年悩ませてきたものだが。一九三〇年代あたりから苛烈を窮めるように

なる。思うことは自由に言えず、文章の一部が伏せ字にさせられることにはじまり、行き着くところは、全文削除に等しい発売禁止である。

言いたくとも言えないということほど、物書きにとって苦しいものはない。読み手の問題で言うなら、知りたくとも知りえないほど辛いものはない。検閲、さらには発売禁止という措置は、書き手の自由の侵害にとどまらず、読み手の知る自由をも奪うものであった。多くの表現者は、しぶしぶ時局に迎合した。一方で、休筆する、密かに書きためる、日記に憤懣をぶちまけるというケースもあった。文学者では、永井荷風や谷崎潤一郎の例があげられる。

矢内原忠雄は専門の植民政策での研究論文は、在職中にその主要なものは、発表済みであった、退職後は「大陸経営と移植民教育」（『教育』一九三八・一、第六巻第一号）ほか、二、三あるものの、あまり見ることがない。「大東亜戦争と英国植民政策」（『帝国大学新聞』一九四二・一・一九）という小論がある。そこで彼は「余は官を辞してから四年を経た。官を辞した時余は思つた、今後再び植民政策を論ずることをなさざるべしと。それは、余が此の学問を以て国家に奉仕することを、無用であるとなされたからである」と書いている。これは彼の抵抗の一文なのであるが、そうは言っても未練があった。彼は専門の学問の出来ないわびしさを、聖書研究や土曜学校での西洋古典研究で満たしていた。

わたしは忠雄が戦時下清野剛という矢内原ゼミ所属の卒業生の援助で「大東研究室」という研究会を立ち上げ、専門の植民政策研究を教え子と共にはじめたことを、楊井克巳の文章[15]で知った。一九四二年（昭和一七）年五月のことである。九人のメンバーが初顔合わせをし、研究室は発足した。が、これは忠雄が言っていることでもあるが、多くの資料を小石川に書庫として借りていた家で、アメリカ軍の空襲で焼いてしまう。「焼けた時には、ある意味においては、自分のそういう方面の研究や仕事にも一段落ついたというような感じがした」[16]ということで、以後、彼はこの面での研究を絶つこととなる。

同じ年（一九四二）の十二月六日（日曜日）、太平洋戦争勃発一周年の午後二時、矢内原忠雄は東京赤坂の溜池三会堂四階大講堂で開かれた特別講演会で、「基督教の主張と反省」という講演を行う。これはいま『矢内原忠雄全集』第十八巻に収録されている。内容は重く、戦中の忠雄を考えるのに落とすことの出来ない重要文献である。忠雄には、この講演会に関して書いた「十二月六日講演会記」という『嘉信』（第五巻一二号、一九四二・一二）に載った文章もある。それによると当日の講演会は、「超満員であった。通路に坐り、両側に立ち、入口の外廊下にまで人垣が厚く重なつた。会費（筆者注、三十銭）を払つた者だけで八八七名、整理がつかなくて会費を受取ることの出来なかつたものが百名はあつたらうといふ。この外満員の為め引き返した者が五、六十名は居た。正に私の講演会としては記録破りの盛会であつた」という。

講演は正味二時間、彼は五年前の東大教授辞任のいきさつから話し始め、時代の中でのキリスト者としての自身の歩みを淡々と語る中で、当日の主題としての「基督教の主張と反省」に入っていく。彼は国民の道徳を清め、高めるためにはキリスト教の信仰の受け入れが必要であることを格調高く、分かりやすく語った。講演の最中に「さうではない」と言う叫びをあげた学生がおり、「黙れ」「出て

往け」等の怒声が乱れ飛んだというが、講演そのものは成功裏に終わった。

この講演で彼は、戦争中旗色の悪かったキリスト教について真剣に語り、「基督教は悪いものではありません。基督教は人を義しくするものである。正義を愛し憐みを施すものであります」と言い、結びでは、「私は諸君に対してかう言ふのであります、キリストによるまことの福音を信じて、諸君自ら救いの確信を得、それによつてわが国をば神の喜び給ふ義しき国と為す為めに、臆するところなく希望を懐いて勇往邁進して頂き度い」と語りかけた。彼は考えていたこと、言おうと思っていたことを皆言ったので、思い残すところはないと、右の「十二月六日講演会記」に書いている。

戦争は苛烈をきわめていた。一九四二（昭和一七）年四月には、アメリカ空軍の日本本土空襲も計画されていた。翌年二月には、ガダルカナル島争奪戦に敗れた日本軍は撤退を決め、敗戦も予想されるようになる。十二月には学徒出陣も開始された。忠雄の尊敬する三谷隆正の五十五歳での死は、敗戦前年の一九四四（昭和一九）年二月十七日のことであった。隆正は若き日の忠雄の親友三谷隆信の兄である。三谷兄弟のことは、すでに第三章の二で、その家系のことも含めて詳しくふれた。

三谷隆正は、東京帝国大学からの教授職の誘いを断り、病で辞めるまで生涯を一高教授（のち、病のため、責任の軽い講師となる）で送った人物である。忠雄同様内村鑑三に師事し、信仰厚き生涯を送った。語学力に秀でた、しかも高貴な精神の持ち主であった。その業績は現在『三谷隆正全集』全五巻（岩波書店、一九六五・九～六六・一）に収録されている。隆正は若き日結婚して一児をもうけたが、妻も子も早世した。その上、自身は胸の病で苦しんでいた。けれども信仰に立った存在は、光を放っていた。女子学院講堂で行われた告別式で、忠雄は司式を担当し、式辞で「私は三谷君の柩を揺さぶって、君を揺さぶり起して、君の遺族と又我々の手に取戻したいのであります。何となれば君は現在の日本国に必要な人間であります」と述べている。[17] 忠雄には国難の時代に三谷隆正の存在は、日本の良心と写ったのである。

ところで、戦時中の矢内原忠雄は、官権の介入による弾圧をいかに多く受けたことか。アジア・太平洋戦争下の彼の歩みは、表現の自由への不当介入との闘いにあったのである。警視庁や検事局による表現への弾圧は、矢内原忠雄の場合、少部数の個人誌『嘉信』にも及んだ。いや、忠雄へのこうした弾圧は、『通信』時代からあったのである。それを確かめておきたい。『矢内原忠雄全集』第二十九巻に付された「年譜」は、実に詳細なもので、使いやすい。この部類の全集収録「年譜」にあっても群を抜く。本評伝もこの「年譜」にいかに助けられたことか。「年譜」の記述と忠雄の回想記に従って、一九三七（昭和一二）年十一月から敗戦までの官権の矢内原忠雄弾圧の記録を作成するなら、以下のようになる。

一九三七（昭和一二）年十一月十日　『通信』十月号発禁、碑文谷警察より残部押収に来る。残部皆無。警察は発行部数など聞いて帰る。

十二月十二日　警視庁刑事二名十四日の講演会（筆者注、「時局キリス

ト教講演会）に関し来訪。

一九三八（昭和一三）年一月二十日　『民族と国家』発禁。

二月七日　『帝国主義下の台湾』『満洲問題』の出版社岩波書店が、当局より自発的増刷中止を指示される。

二月二十一日　警視庁に出頭を命じられる。

二月二十三日　『民族と平和』発禁。

七月二十一日　検事局に出頭、八時間半にわたり訊問をうける。

七月二十二日　検事局に出頭、八時間にわたり訊問をうける。

九月二十三日　『嘉信』「送別歌」削除処分を受ける。

一九四〇（昭和一五）年八月二十八日　朝鮮平壌監理教会で講演。責任者警察に召還され、刑事旅館に来る。

一九四三（昭和一八）年二月十三日　警視庁に呼び出される。

『嘉信』一月号発禁。

四月　『嘉信』四月号掲載「『嘉信』の発行について」で注意処分を受ける。

一九四四（昭和一九）年一月七日　警視庁に呼び出され、『嘉信』一九四三年十二月号につき注意を受ける。

六月二日　警視庁の青木警部『嘉信』に対し、企業整備による廃刊届提出を要求したが、拒否する。

六月十二日　薄田警視総監に意見書を手渡す。

六月十七日　警視庁坂本検閲課長に呼び出される。

七月一日　警視庁検閲係長に呼び出される。『嘉信』の十二月終刊を申し渡される。

一九四五（昭和二〇）年六月　憲兵隊司令部から人が来て、『嘉信会報』第三号を要求する。

当局の矢内原忠雄とその著書や個人誌『通信』『嘉信』『嘉信会報』への弾圧は、忠雄自身敗戦間もない一九四五（昭和二〇）年十二月刊行の『嘉信』第八巻第十二号の「戦の跡」（『私の歩んできた道』収録）でも回想している。かいつまんでその骨子を述べよう。まず『通信』への弾圧は、例の「日本の理想を生かすために一先づこの国を葬つて下さい」（『通信』47号、一九三七・一〇）に対してであり、碑文谷警察は、残部押収という挙に出る。が、残部皆無のため、発行部数などを聞いて帰ったという。続いて『民族と国家』と『民族と平和』の発売禁止に際しては、司法処分も伴い、「警視庁に召喚

されて調書」を取られる。さらに検事局に出頭を命じられ、思想検事の取り調べを受ける。が、彼は「爾来、発禁、削除、若しくは注意の処分を受けた事何回なるやを知らず、毎年四、五回警視庁に喚び出されない年とてはなかつたが、真理の言を弾圧する処分は神の前には無効であるとして、私は一切これを意に介しなかつた。しかるに日本出版文化協会は、かかる処分の度毎に『嘉信』に対する用紙の割当を大幅に削減した」[18]という。

内務省警保局の『特高月報』は、この頃の矢内原忠雄を要注意人物としてマークしていたことを示す。一九四一（昭和一六）年十二月の同月報には、無教会主義キリスト者として忠雄の名を記し、「従前と何等変らざる空想的・独善的平和観の下に我今次聖戦目的を誹謗抹殺するが如き所説を流布しつつあるを以て、同一派の運動に対しては格別厳重なる警戒取締を加ふるの要ありと認めらる」とある（『昭和特高弾圧史3』太平出版社、一九七五・九）。

『嘉信』は日本出版文化協会に、設立当初から加入していたが、あまりの仕打ちに自発的に退会していた。その後用紙の割当は、警視庁情報局の「Aという検閲課の警部」（筆者注、青木警部）が暗躍し、『嘉信』の印刷を依頼していた学園事務所へ一九四三年一月号のための用紙を回さず、『嘉信』を「暗殺」しようとした。忠雄は『嘉信』も止める時がきたのかと、二、三の友人の意見を聞く。後輩の村山道雄（後年、山形県知事・参議院議員、忠雄は朝鮮伝道訪問の旅で世話になった）が、警視庁の検閲課長に会って、真意を問うと、検閲課長はこのことを知らず、A警部の独断であることが解る。

「嘉信の印刷続刊差支なし」という検閲課長の言明によって、ひとまず危機は脱した。が、一九四三年一月号の『嘉信』は、出るとすぐ発売禁止処分を受ける。巻頭の「年頭の辞」と「アモス書大意」とがいけないというのであった。「年頭の辞」は、「愛する日本よ、宇宙の神を信ぜよ。世界の神を信ぜよ」にはじまり、「愛する日本よ、大なる試煉が汝に臨みつつある。汝如何なる力に恃んで、之に耐えんとするか。恃むべきは永遠の神である。恃むべからざるは人の謀略である。汝恃むべき者に恃んで、国を富嶽の泰きに置け」で結ばれる。また、「アモス書大意」は、旧約聖書の小預言書の一つ「アモス書」の全体像をわかりやすく六つの視点から述べたもので、どこが発禁の理由であるのか定かでない。

四月号は、注意処分を受ける。今度は「嘉信の発行について」の前半がいけないというのである。これまたどこがいけないのか判然としない。強いて言うなら、「まこと『嘉信』は紙に乏しくせられ、印刷を脅かされ、検閲に狭められて、死の陰の谷を歩んで居るのである。併しヱホバ我と偕に在すが故に我は禍害を怖れず、汝の笞（しもと）汝の杖われを慰め給ふのである。先に一月号の印刷将に成らんとした時某方面からの妨害によつて『嘉信』の発行継続が困難に陥り、既に討死を覚悟したが、『嘉信』の為めにもシャパンの子アヒカムあり、ネリヤの子バルクありて、無事発行を続くるを得たことは、『嘉信』とその読者の為めに幸福であつた。されど『嘉信』の著者はあはれなる哉、神は彼の苦労を緩め給はず、刀折れ矢尽くるまで前進を促し給ふ」の箇所が、当局の忌避にふれたのかも知れない。引用箇所に出て来るアヒカムとバルクは、エレミヤを助けた『旧約聖書』中の人物である。

忠雄は事実を書いているのである。けれどもそれは受け入れられず、注意処分である。狂った時代は、狂った人物を生む。ドイツで

はヒットラーが、イタリアではムッソリーニが暗躍した時代である。日本では陸軍大将東条英機の下で、太平洋戦争が準備されていた。箕田胸喜のようなエセ学者がいたかと思うと、下積みの官僚A警部（青木警部）のような、執拗に矢内原忠雄の言動を監視し、敵視する人物がいたのである。彼は忠雄にとって、ヴィクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』のジャベール刑事のような存在であった。時代の生むそうした悪魔的人物とも忠雄は臆せず闘った。なお、矢内原忠雄の戦中の抵抗に関しては、金田隆一「戦時下における矢内原忠雄の抵抗」[19]が参考になる。

一九四三（昭和一八）年五月号（第六巻第五号）の『嘉信』は、一部に削除処分を受ける。忠雄の回想記「戦の跡」（初出、『嘉信』一九四五・一二）には、「黙示録講義中、「地上における現実の自然的災害と社会的動乱との中にありて、我らは自らかく問ひかく嘆く」という一句は、国家を呪詛するものだというのである。当局の口より出たこの「呪詛」という言葉は、極めて強く私の神経を刺激した。これまで「自分の言うことは言う、しかしそれに対する当局の処置には抗議せず、」ということを原則とした私も、今は黙って引込むわけに往かなかった。警視庁の玄関を出た私は、その足で情報局の検閲課を訪れ、係官に会って呪詛云々を詰問した。彼は私の問に対してまともに答えることを為し得ず、……」とある。忠雄は困難な時代の直中で闘った。

この年七月、北海道で『喜の音』を主宰していた浅見仙作が、札幌警察特高課に召還、留置された。忠雄はこのニュースを知り、『嘉信』第六巻第九号（一九四三・九）の埋め草欄に、「祈れ」のタイトルを用い、「北海道に於ける無教会福音の老使徒浅見仙作翁、七十余歳の老齢の身を以て、去る七月三十日以来留置所に在りと聞く。我らは今ピリピ一の一二―二〇、二の一二―一八を翁よりの言葉として読む。友よ、翁の為に祈れ、翁の事ふる福音の為に祈れ」と書く。浅見仙作は内村鑑三の弟子で、無教会の立場で北海道で福音を説いた人であり、忠雄も一目置いたキリスト者である。時代はこうした老いた人をも弾圧するに至る。

一方で、戦後、良心的知識人とされた人々も、当時においては、時勢におもねった発言をしていた。半藤一利の『昭和史』[20]には、例として五人の知識人が、真珠湾攻撃の勝利に対して、いかに肯定的発言をしたかを例文付きで示す。五人とは、中島健蔵・本多顕彰・小林秀雄・亀井勝一郎、そして横光利一である。いずれも、当時すぐれた評論家・作家とされた人々である。他方、賢く、また、生活も何とか維持できる気骨ある一部の文化人は、書くことをやめ、沈黙した。が、忠雄は最後までペンを折ることがなかった。

彼には生活があった。妻と三人の子、それに亡くなった藤井武の遺児五人の生活と学費の面倒を見ねばならなかった。東大退職当時は、『余の尊敬する人物』や訳書『奉天三十年』などが売れたからまだよい。が、それは一時的収入に過ぎなかった。戦争の進展とともに本の売り上げは減じていった。結局は『嘉信』による購読料が、唯一の収入源になっていたのである。前章でちょっと触れた古本屋にも今さらなれない。生活をどうすべきかは、戦争中の矢内原忠雄の大きな課題であった。彼は自分なりの方法で生きるほかなかったのである。それには書くこと以外考えられなかった。彼を慕い、支持する人はいた。彼らに『嘉信』を送り、誌代で収入を得る、それが戦時中の彼の生活であった。それは神に示された、賢い戦中

の生きる途であった。

戦争はこの年（一九四三）には、泥濘にはまりこみ、敗戦の色も濃くなった。九月には、三国同盟の一角、イタリアが連合国に無条件降伏した。翌一九四四（昭和一九）年七月、東条内閣は戦線不利をもって総辞職。十一月一日にはサイパン島から発進したB29によって東京が偵察され、同二十四日には、初空襲を受けている。戦場も後方も区別のない国民総動員の時代の中で、雑誌『嘉信』は危機を迎える。敗戦一年前の一九四四年の夏のことである。先の「戦の跡」には、「政府は出版企業整備統合の法律を制定し、雑誌の廃刊を強要するの挙に出た」とあり、六月二日に警視庁検閲課に行くと、応接した例のA警部（青木警部）から「もう廃めてはどうか」と言われる。

忠雄の闘いは、ここから本格化する。彼は自主廃刊を拒絶し、「これを廃するは、自分として国に忠なる所以でない」とし、警視総監に面談して、その志を述べ、「意見書」を手渡す。「戦の跡」には、「昭和十九年六月十二日」の日付で、薄田警視総監宛に出した「意見書」の全文が載っている。薄田警視総監とは、薄田美朝（すすきだよしとも）のことである。薄田は秋田県出身。一八九七（明治三〇）年一月十六日の生まれ。二高を経て東大法学部を卒業、内務省に入り、警察畑を歩いた後、群馬や鹿児島の知事をつとめ、東条内閣時代の一九四三（昭和一八）年四月、警視総監に就任した。戦後は北海道選出の衆議院議員となり、北海道開発審議会委員や裁判官訴追委員などを歴任している。

薄田への忠雄の意見書のさわりの部分を引用すると、「余は退官後月刊個人雑誌『嘉信』を発行し、基督教聖書の研究及び伝道に従事して今日に及べり。その間検閲の難を蒙ること数次に上りたりと雖も、字句の末端によらずして精神の所在を酌まるるに於ては、余の言論のすべて一片憂国の至誠に出づるを察知せらるるに難からずと信ずるものなり。」「『嘉信』は実に国民の正しき信仰を培ひ、その精神力を旺盛ならしめ、道徳心を堅実ならしむることを目的とするものなり。」「近頃当局は企業整備の一般的方針に基き、『嘉信』に対しても廃刊を勧告せられたり。『嘉信』は形小なれども国民の良心也、国の柱なり。『嘉信』を廃するは国民の良心を覆し、国の柱を除くに等し。」などとある。忠雄はこの「意見書」を持って警視庁に出頭し、薄田総監に面会し、所信を表明した。

忠雄の「戦の跡」によると、「総監の態度は慇懃」であったという。そうであろう。忠雄の四歳下、東大法学部出のこの後輩は、忠雄が法学部をトップで卒業したことや、その退官理由もわかっていたろうから、何も知らない青木警部などとは違う。二人は四十分ほど話をしたが、「要件に関しては下僚をして研究させるという答弁であった」という。数日後警視庁検閲課長から面会を求めてきたので行くと、「廃めてはどうか、」という。忠雄は前言を繰り返す。会談は一時間に及んだ。日を経て、今度は検閲係長から呼び出しがあった。会談の結果は、十二月末まで続刊を認めるというものであった。これは特別中の特別の扱いなので、それで止めてくれとのことであった。とにかく忠雄は、ねばりにねばった。彼は太平洋戦争中、なぜ、かくも闘い、耐え抜くことができたのか。そこには彼の徹底した聖書研究から来る信仰と、西洋古典文学から学んだ知恵があった。それだからこそ堪え忍ぶことができたのである。

『嘉信』は一九四四（昭和一九）年十二月号（第七巻第十二号）まで

刊行し、一九四五（昭和二〇）年一月から名を『嘉信会報』と変えて継続刊行されていく。誌名の変更は言うまでもなく当局への配慮であった。実際には『嘉信会報』として『嘉信』の下に「会報」の二文字を小さく印刷したという変更に過ぎないので、外見には雑誌名が変わったとは思えない。ここにも忠雄の意地が、否、戦時下抵抗の強い意識が感じられる。

四月十三日の空襲で、印刷先の東京市豊島区西巣鴨四―一二六の学園印刷所が空襲に遭うと、忠雄は謄写版印刷で雑誌の刊行を続け、敗戦に至る。東京目黒の今井館資料館には、謄写版刷りの原本が保存されている。忠雄の記すところによると、敗戦の年の六月には、「憲兵隊司令部から私の家に人が来て、『嘉信会報』殊に第三号を要求したが、何事も起らずして終戦を迎えた。戦争中「今度は矢内原を引張るぞ」という警察の威嚇的言辞が、私の耳に伝ったことも二、三度あったが、私は何の恐怖も感じなかったし、彼らは遂に一指をも私の身辺に触れることを得ず、『嘉信』の発行を一回も阻止するを得なかった」（『戦の跡』）という。

戦中のこのような矢内原忠雄の闘いを、歴史学者の家永三郎は、「太平洋戦争期の暗黒時代に圧迫に屈せず思想的抵抗をつづけた事実。多くの知識人が進退をあやまったこの時期の彼の思想活動は、日本人良心のともしびの吹き消されるのをかろうじて守り抜いたものとして、高く評価されねばならないであろう」[21]とする。先にも記したが家永三郎は、矢内原忠雄の戦時下抵抗を的確に評価し得たすぐれた歴史学者であった。

こうした中にあっての矢内原一家の朗報は、長男伊作と故江原萬里の長女鋤子との結婚であった。『嘉信会報』第一号（一九四五・一）に、「私の家では長男伊作と故江原萬里の長女鋤子とを去る十二月二十六日に結婚せしめた。イサクは言ふまでもなくアブラハムの子であって、平和の人であり、鋤子はイザヤ書二の四から得られた命名である」との記事が載っている。「イザヤ書二の四」とは、新共同訳『聖書』には、「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。／彼らは剣を打ち直して鋤とし／槍を打ち直して鎌とする。／国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばない」とある。鋤子とは、一見見慣れない名であるが、平和への願いが託された命名であったのである。忠雄は故人からその命名のいわれを聞いていたのであろう。

四　敗戦と大学復帰

一九四五（昭和二〇）年七月二十六日、アメリカ・イギリス・中国（中華民国政府）は、日本に無条件降伏を勧告する旨の「ポツダム宣言」を発表した。日本は当初これを黙殺したが、八月六日広島に、同九日長崎に原子爆弾が投下され、その混乱の中でソ連が突如、対日参戦するに及んで、八月十四日これを受諾した。戦争で矢内原忠雄は、優秀な教え子の秋山宗三をガダルカナル島で、二宮健策を広島の原爆で失った。

八月十五日、彼は敗戦の日を山中湖畔で迎える。『嘉信会報』第八号に忠雄は「戦争終了」と題した感想を記している。長くなるが忠雄の敗戦直後の心境が語られているので、以下に全文を引用する。

余は日曜集会と土曜学校をば、七月二十九日の日曜を最後として三週間の暑中休暇に入ることとし、翌三十日、心身の疲労休養の為め当地（山中湖）に来た。此処で『嘉信』八月号の原稿を書き、推敲を重ねた後、全く脱稿したのは八月十五日午前であつた。その正午、隣家のラヂオで戦争終了の事を知つたのである。

顧れば昭和十二年七月、蘆溝橋事件の直後、やはりこの山中湖畔の家で、余は沸騰する思ひを以て「国家の理想」と題する一文を書いた。それから中国、四国方面へ講演旅行に出たのであるが、岡山駅頭にて測らずも右論文が発売禁止処分を受けた事を知つた。日支事変と共に、余自身の戦も始まつたのであつた。

爾来満八箇年にして、此の地にて戦争終了の報を聞く。今更何が成功であつたとか失敗であつたとか、誰に責任があるとかないとか、何人の預言が適中したとかしないとか、かかる事を論ひたりとして何かせん。余はそのやうな事柄に興味を有たない。余はただわが国民が此の機会に於いて真に謙遜となり、己が罪を悔改めてイエス・キリストを受け容れんことを求む。而して真に正義と平和を愛する国民となりて、神がこの国に与へ給う大任を果さんことを希ふ。生来の人の慾を棄て、新たなる人として生れ更るのでなければ、戦争終了も戦争開始と同様、国に何らの光をもたらさないのである。それにつけても余は、大東亜戦争開始以来俄かに「日本的」に転向した基督教会が、戦争終了と共に急に親米的媚態を呈する如き醜状を示さざらんことを、希望せざるを得ない。

信仰により、如何なる心構を以て戦争終了を迎ふべきか、余は屢々本誌に説いて来たつもりである。『嘉信』八年の筆陣を指導し且つ守護し給うた神の恩恵を、余はここに衷心感謝する。余はもう何時死んでもよいと思ふ。神よ、願はくは余の霊を受けいれ給へ。

夕食後、余は一人湖辺に出た。上弦の月富士山頂の上空に照りわたり、星は明かであるが光薄く、大気は秋のやうに冷え、漣は軽く音を立てた。余は人なき渚に踞し、歩き慣れた湖畔の道を歩き、長き時を一人で過したが、祈も歌も思ひも皆短かく、きれぎれであつた。併し頭は冴え、心は溢れて居た。やうやくにして家に帰り、燭を点じて湖辺の思ひを文に認む。

何ごともなかりし如く月の夜に
しづもり立てり富士の神山

（昭和二十年八月十五日午後十時廿分、山中湖畔梁山荘にて）

戦争はようやく終わった。長かったの思いが彼の胸をよぎった。戦争は彼の生活を激変させた。大学教授という安定した職場を失い、研究者の道は絶たれた。当初は生活の糧をどうすべきかにさえ迷った。健康も慢性下痢と歯痛に悩まされ、いたく衰えた。が、不思議にも彼は路頭に迷うことも、栄養失調で倒れることもなかった。信仰が彼に勇気を与え、執筆生活は彼と一家を支えた。失職後、敗戦に至るまで、忠雄は「野に叫ぶ」者として、個人誌『嘉信』に依り、沈黙することも、媚びることもなく、抵抗の声をあげ続けた。矢内原忠雄は最後まで時代と時の権力とに立ち向かった、希有な思想家でもあったのである。

山中湖畔の別荘で詔勅のラジオ放送を聞いた時の感想を、後年忠雄は『私の歩んできた道』では、「僕は昭和二十年八月十五日に、終戦の詔勅を富士山麓の山中湖畔で聞いたんです。隣りの家のラジオで。そのときに感じたことは、今でも忘れないな。これから新しい時代が来たのだから、平和のために働かなきゃいかんということを強く自覚したですね」[22]と言っている。彼は敗戦時、満五十二歳になっていた。まさに働き盛りの年齢であった。

敗戦で検閲制度は消滅した。苦しい思いの連続で、敗戦の年の一九四五（昭和二〇）年一月号から『嘉信会報』と名を変え刊行してきた個人誌も、九月号からは元の『嘉信』に戻った。謄写版刷りの雑誌は、第八巻第八号（一九四五・八）で終わり、九月発行の第八巻第九号からは、活字に戻った。

十月号（第八巻第十号）の「短言」に、忠雄は「走馬燈」の小見出しの下、次のように言う。「大正年代民本主義・自由主義の流行に次いでマルクス主義が風靡し、それから軍国主義・全体主義の横行に代つて今また民主主義・自由主義の再流行を見ようとして居る。若し永遠の真理たる聖書の言を学んでその上に立つにあらざれば、走馬燈の如く移り変る時代思潮の流行の中にありて、我が国民は終に無思想・無性格の民として終る危険がある」と。これは先見性と預言性に満ちたことばとしてよい。敗戦後七十年を越えた現在も、今もって日本人一人一人に迫るものがある。

敗戦後、矢内原忠雄は講演活動に精を出す。十月二～三日、長野県木曾福島国民学校に於いて、「日本精神への反省」という題で講演をしたのにはじまり、十一月六、七日には、長野県松本市郊外の東筑摩郡広丘国民学校で、「平和国家論」と題した講演を行う。『嘉信』の同年十一月号（第八巻第十一号）に、その記録を見出せる。そこには「遠近より参集の熱心なる溢堂の聴衆、殊に多数の国民学校教員諸君の前にこの問題について語り得たことは幸福でありました。広丘の地は桔梗ヶ原と称し、地勢高爽、秋気凛烈、志操高潔の士を参するに適します。日本新生について私は大都会に期待せず、地方に期待します。既存の大学に期待せず、国民学校に期待します。貴族と官僚に期待せず、平民と児童に期待します」とある。

木曾福島国民学校と松本郊外の東筑摩郡広丘国民学校での講演は、『日本精神と平和国家』の題下、岩波書店から岩波新書の一冊として、一九四六（昭和二一）年六月二十五日に刊行され、のち『矢内原忠雄全集』第十九巻に収録された。速記の文章をもとに、手を加えたものである。忠雄の〈敗戦講演〉とも言ってよいこれら一連の講演は、「日本精神への反省」というタイトルにも見られるように、敗戦に至った日本人を支配したスピリット（民族精神）の反省にある。いま『矢内原忠雄全集』第十九巻収録の「日本精神への反省」の目次を記すと、「民族精神とは何か」にはじまり、「日本精神の特質」「本居宣長の思想」「本居宣長批判」を経て、「太平洋戦争と日本精神」、そして「日本精神を嗣ぐ者」で終わる。忠雄は宣長の思想、その「神ながらの道」を徹底的に批判する。その上ではじめて新国家の建設はあり得ると言う。

いま一つの「平和国家論」は、カントの『永久平和論』などを例に、平和国家建設はいかに在るべきかを論じたものであった。「国是としての平和」の章は、七十年後の今日の政治状況をも撃つものがある。佐藤全弘に『矢内原忠雄と日本精神』[23]という一書があるが、矢内原忠雄の戦後の出発を、共感をもって語ったものとなって

いる。

敗戦の年から翌年にかけて、矢内原忠雄は実に多くの講演を、依頼されるまま各地で行っている。彼はもともと旅が好きだった。戦後の交通事情は極度に悪かったが、彼はそれをものともせずに、九州から北海道まで日本各地に出向いている。西村秀夫の評伝『矢内原忠雄』[24]によると、「一九四五年十月二日から翌年十月六日までの一年をとってみると講演回数は約五二回、次の一年間にも四〇回以上」とのことである。単純計算すると毎月四回、週にすると一回になるから大変な回数である。

一九四五（昭和二〇）年十月三十日、ＧＨＱは教育関係の軍国主義者・超国家主義者の追放、調査機構の設置などを指令した。また、十一月二日、文部省は自由主義教授で戦中に大学を逐われた人々の優先復帰と、軍国主義者および占領政策に反意を示す者の解職を通達した。それに伴い十一月四日、東京帝国大学経済学部教授会は橋爪明男・灘波田春夫らの退職と大内兵衛・矢内原忠雄・山田盛太郎ら七人の復職を決める。同月十九日、京都帝国大学の総長鳥養利三郎は京大事件（瀧川事件）以前の状態に戻すという趣旨に基づき京大再建方針を示し、瀧川幸辰や恒藤恭・田村徳治らが教授に復帰することになる。

当時の東大経済学部の学部長は、忠雄の一高時代からの友人舞出長五郎であった。舞出は戦中の厳しい時代も耐えて、学部長の重責にあった。教授会の決定に基づき、舞出はさっそく忠雄の経済学部教授復帰を要望した。復帰の経緯は、これまでしばしば引用した「戦の跡」に忠雄自身も書いているので、次に初出『嘉信』（第八巻第一二号、一九四五・一二）から引用する。

戦争終了後、思想問題で大学を負われた諸教授の復帰問題が起り、舞出経済学部長から私へも交渉があつた。私は次の諸理由によりこれを辞退した。

一、一度広い野に出て自由の空気を吸うた者が、また狭い囲いの中に帰るのは面白くないこと。

二、私はこの八年間基督教伝道に従事して来たので、今後も之に専念する考であること。

三、伝道と教授と二つの職務を果すには、自分の体力に自信なきこと。

四、私は自分の専攻した植民政策関係の蔵書を、大部分空襲によって焼失したこと。（之は小石川に部屋を借りて、置いてあつたものである。）

固辞すること四度、懇請せられること五度、遂に私も舞出君の努力に免じて復帰を内諾した。但し左の条件をつけた。

一、『嘉信』其の他伝道上の仕事は之を継続すること。

二、理由の何たるを問はず伝道と教授とが両立せざるに至つた時は、何時でも教授を辞職すること。

忠雄は信念に生きていた。右に続く文章で彼は言う。「大学教授としての私の地位と仕事とが福音伝道の妨げとならず、却つて真理証明の武器として神の祝福を蒙るやう、切に祈り希ふ。神の僕たる以外に私のこれまでの生涯もなく、今後の生涯もないのである」と。彼の信念とは、「神の僕」として生きることであった。彼は同じ内村鑑三門下で、東大法学部長となっていた南原繁を部長室に訪ねる。南原は学内事情を詳しく説明し、復帰を強く勧めた[25]。かくて

忠雄は右の条件をつけ、舞出の熱心な勧誘を承諾する。なお、忠雄の東大復帰に関しては、竹中佳彦の『日本政治史の中の知識人（下）』[26]に資料を博捜した記述がある。

一九四五（昭和二〇）年十一月二十八日付で矢内原忠雄は東京帝国大学教授に復帰した。むろん経済学部勤務である。実際に研究室に足を踏み入れたのは、この年十二月一日であった[27]。ちょうど八年間のブランクがあったことになる。実際に復帰すると、彼は担当の植民政策論を、国際経済論と名称を変更した。日本はもはや植民地をもつ帝国主義国家ではなくなった。しかし、国際経済に依存する必要は、より強まるとの認識が彼にはあった。それが担当科目の名称変更の主な理由であった。

戦時中忠雄は土曜学校を主宰し、アウグスチヌスやアダム・スミスを論じることで、学問への渇を癒していた。植民政策論での彼の目指す実証を重んじた方法は、公表すら出来なかったからである。検閲という関門は、彼のそれまでに発表した著作をすら差し押さえ、発売禁止とした。ひそかにはじめた「大東亜共栄圏の批判的研究」の母胎「大東研究室」は、前述のようにアメリカ軍の空襲で資料を焼いてしまう。「一～二章を書けば完結することになっていた「帝国主義論」の原稿も焼けてしまった」[28]という。が、彼は悲観はしなかった。戦後はじめた国際経済論は、今後の経済学という学問の中核となるであろうことが、わかっていたからである。一方、戦中・戦後の彼に、研究対象として新たに浮上したのは、内村鑑三の衣鉢を継ぐ聖書研究であった。『イエス伝―マルコ伝による―』にはじまる聖書講義は、戦中の彼の主要な仕事となっていた。それは戦後の大学行政で忙しい生活を送った時期にも継続されて行く。

注

1　矢内原忠雄「『通信』の廃刊と『嘉信』の創刊」『通信』第四九号、一九三七年一二月、のち『矢内原忠雄全集』第一七巻収録。五八ページ

2　矢内原忠雄「創刊の辞」『嘉信』第一号、のち『矢内原忠雄全集』第一七巻収録。七九～八〇ページ

3　矢内原伊作『矢内原忠雄伝』みすず書房、一九九八年七月二三日、四三一ページ

4　藤田若雄「悲境にあつて福（さいは）ひの日を／想ひかへすに優る悲しみなし」『土曜学校講義　月報Ⅶ』一九七〇年一一月。二～三ページ

5　籾山民子「庶民のもつ最大の宝物」『土曜学校講義』月報Ⅶ、一九七〇年一一月、日付なし。一～二ページ

6　柴田真希都「伝道者・牧会者・聖書研究者」鴨下重彦・木畑洋一・池田信雄・川中子義勝編『矢内原忠雄』東京大学出版会、二〇一一年一一月二日。二四一ページ

7　矢内原忠雄「『藤井武全集』再刊に就て」『嘉信』一九三八年三月、のち『矢内原忠雄全集』第二四巻収録。八四七ページ

8　藤井　立「叔父の想い出」『矢内原忠雄全集』月報27、一九六五年五月一四日。のち南原繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』収録。六五一～六五六ページ

9　川中子義勝「「宗教改革論」と東大聖書研究会」鴨下重彦・木畑洋一・池田信雄・川中子義勝編『矢内原忠雄』東京大学出版会、二〇一一年一一月二日。二〇四ページ

10　村山道雄「昭和十五年京城聖書講習会の思い出」『矢内原忠雄全集』月報6、一九六三年八月一二日。のち南原繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』収録。三一六～三二〇ページ

11　藤田若雄『矢内原忠雄　その信仰と生涯』教文館、一九六七年一二月二五日、四三ページ

12　赤江達也『「紙上の教会」と日本近代　無教会キリスト教の歴史社会学』岩波書店、二〇一三年六月二六日。一九〇ページ

13　吉田裕『アジア・太平洋戦争』（シリーズ日本近現代史⑥）岩波書店、二〇〇七年八月二一日。五四～六二ページ

14　お茶の水公開聖書講義第一講「ガラテヤ書の熱心」『嘉信』一九三八年一〇月（第一巻第一〇号）、のち「ガラテヤ書講義」として、他のガラテヤ書関係講義とともに『矢内原忠雄全集』第八巻収録。引用部分は四二五ページ

15　楊井克巳「『大東研究室』のころ」『矢内原忠雄全集』月報9、一九六三年一一月、のち南原繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』収録。三四八～三五三ページ

16　矢内原忠雄『私の歩んできた道』東京大学出版会、一九五八年三月三一日、のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。五六ページ

17　矢内原忠雄「三谷隆正君告別式辞」刊行委員会編『三谷隆正の生と死』新地書房、一九九〇年七月三〇日より引用。一七～二三ページ。なお、初出は『三谷隆正誄辞集』（私家版、一九四四・四、日付なし）である。この私家版追悼集は、今井館資料館が架蔵している。

18　矢内原忠雄「戦の跡」『嘉信』第八巻一二号、一九四五年一二月二〇日、『私の歩んだ道』東京大学出版会、一九五八年三月三一日所収。のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。一〇三～一一七ページ。引用は『嘉信』による。

19　金田隆一「戦時下における矢内原忠雄の抵抗」『戦時下キリスト教の抵抗と挫折』新教出版社、一九八五年一〇月三一日。一〇六～一七九ページ

20　半藤一利『昭和史』平凡社、二〇〇四年二月一〇日。三九〇～三九一ページ

21　家永三郎「日本思想史上の矢内原忠雄と私の接触した矢内原先生」南原繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』収録。六三三～六三四ページ

22　注16に同じ。六一ページ

23　佐藤全弘『矢内原忠雄と日本精神』キリスト教図書出版社、一九八四年一〇月一〇日

24　西村秀夫『矢内原忠雄』日本基督教団出版局、一九七五年七月一〇日。二四〇ページ

25　山口周三『南原繁の生涯　信仰・思想・業績』教文館、二〇一二年九月二五日。二〇七ページ

26　竹中佳彦『日本政治史の中の知識人（下）』木鐸社、一九九五年二月二〇日。五二七～五三〇ページ

27　注16に同じ。六二ページ

28　注11に同じ。七三ページ

受領日　二〇一六年四月　八日
受理日　二〇一六年六月十五日